

『力への意志』の構成について(一)

——第一書「ヨーロッパのニヒリズム」——

菅野孝彦

ニーチェの思想発展の後期、すなわち『ツァラトゥストラ』以後のニーチェ思想に関する諸研究を俯瞰するとき、われわれはそこに二つの流れを見ることができ、一方の流れは、ニーチェの妹エリザベートやペーター・ガスト等を中心とするニーチェ文庫の立場であり、他は、ニーチェの生涯の友人であったフランツ・オーヴァベックに発する流れである。オーヴァベックに代表されるこの流れは、ニーチェ文庫の公刊する出版物が、偽造を含んだものであることを指摘し、ニーチェ文庫に對立していた。この流れに属すエーリッヒ・ボーダツハは、『ニーチェ崩壊期の諸著』において次のように語る。ルドルフ・シュタイナー、フリッツ・ケーゲル、エルンスト・ホルネッファア、アウグスト・ホルネッファア、カール・アルブレヒト・ベルヌリ、シャルル・アンドレール、ヨーゼフ・ホーフミラー等の著書や論文を知る者は、数十年前からニーチェ文庫の出版

物が偽造にさらされていることを知っていた。⁽¹⁾しかし、ニーチェ文庫が遺稿をも含めた資料を一手に管理する限り、オーヴァベック等の指摘は偽造のあったことを示唆(圈点筆者)するにとどまり、さらに踏み込んで資料的に偽造箇所を明らかにするまでには至らなかった。この試みがなされるためには、ニーチェの公刊物や遺稿の年代順配列に基づく歴史的批判全集が現われねばならなかった。

一. ニーチェの「私の〈哲学〉」

ニーチェは、一八八四年四月七日付けフランツ・オーヴァベック宛の書簡において、次のように語る。

「私は、一歩一歩着実に多くの分野を通り抜けねばなりません。というのも、私は、『ツァラトゥストラ』によってその入り口(Vorhalle)を作った、私の〈哲学〉を完成させるた

めに、今後の五年間を用いようと決心したからです。」

この文面からわれわれは、『ツアラトゥストラ』を入り口とし、いわば母屋(Hauptbau)である「私の〈哲学〉」を打ち立てようとするニーチェの、並々ならぬ決意を読み取ることができる。

だが、たしかにたんにニーチェのこの決意の表明をもって、彼の後期思想の展開に哲学体系の樹立を見出そうとすることは、余りに性急に過ぎるであろう。とはいえ、この「私の〈哲学〉」を手掛かりとして彼の思惟を説明することの重要性は、論をまたないであろう。なぜなら、「私の〈哲学〉」を出発点としニーチェの哲学体系を呈示し得るのであるならば、われわれはその体系構成の過程を明らかにすることになり、また逆に、たとえ哲学体系樹立の歩みが頓挫することを呈示したとしても、如何なる点で頓挫したのかを明らかにすることによって、ニーチェの哲学的奮闘の歩みが明らかになるからである。

この「私の〈哲学〉」を説明しようとするとき、われわれは、先に示唆されたテキスト偽造の問題に結論を与えねばならない。すなわち、『力への意志』の文献批判に取組まねばならない。というのも、この著作こそ、ニーチェの哲学的名著とみなすニーチェ文庫と、そこには偽造が存在すると主張するオーヴァーベック等とを大きく隔てる徴表だからである。かくして、われわれは以下のように問う。――はたして『力への意志』は、テキストとして使用に堪え得るのであるか。もし堪え得ないとするならば、それは如何なる点で不十分なのであるか。――

たしかにこの問いは、アルフレッド・ボイムラーのように

「『力への意志』はニーチェの哲学的名著である。」と語るならば、容易に回避され得るのである。すなわち、『ツアラトゥストラ』を入り口とし『力への意志』を母屋とする枠組に、ニーチェ思想を収斂させることが可能となるからである。しかしながら、カール・シュレヒタが三巻本のニーチェ選集(以下シュレヒタ版と略記)を世に出して以来、ボイムラーの枠組をもってニーチェ思想を理解することは、大きな困難に陥ったといえる。なぜならシュレヒタは、ボイムラーの依拠したグロースオクターフ版『力への意志』がニーチェの著作ではないとする観点から、『力への意志』所収の断片を「八十年代の遺稿から(Des dem Nachlass der Achtzigerjahre)」と題し、年代順に配列し直したと主張したからである。つまりシュレヒタの試みは、ボイムラー等に見られる『力への意志』をニーチェの哲学的名著とするいわゆる「ニーチェ伝説(Nietzsche-Legende)」の破壊を目的としていたのである。

それでは、シュレヒタ版の存在を指摘することによって、先の問いに十分な答えを与え得るのであるか。端的に言って、否である。シュレヒタ版は「八十年代の遺稿から」と題しながらも、『力への意志』に含まれない断片を取りあげていないという批判は、度外視するとしても、われわれは他にも幾つかの問題点を指摘できるからである。シュレヒタ版がニーチェの草稿そのものに基づくのではなく、『力への意志』が依拠するグロースオクターフ版を基本資料とするがゆえに生じるのであるが、第一に、遺稿の配列はけっして正確な年代順になってい

ない。第二に、『力への意志』において無理につなぎ合わされた断片を、草稿に忠実な形に復元しているとはいえない。第三に、原文には誤りがある。」といった問題点を指摘できる。断片の年代順配列の企図は正当であるとしても、このようにシュレヒタ版は、グロースオクターフ版『力への意志』所収の断片をその版の内部において配列し直すことによる困難・限界を示すのである。だが、もちろんこのシュレヒタ版の限界は、第二次世界大戦後ニーチェの遺稿を保管する東ドイツのゲーテ・シラ文庫を利用し得なかつたという時代的制約のなさしめたとであり、シュレヒタの企図はむしろ継承さるべきことなのである。事実グロイター版は、歴史的批判全集としてシュレヒタの理念を受けつぎ、ニーチェの草稿を基本資料とする年代順配列を編集の方針としている。

たしかに、先の問いに答えるには、グロースオクターフ版『力への意志』と、それに対応するニーチェの草稿を比較する真のテキスト・クリイティークこそが望まれる。しかし、ニーチェの草稿そのものを利用することは、判読の点等きわめて困難な問題をはらんでいる。それゆえ、『力への意志』のテキストの問題は、グロースオクターフ版以下、GOA版と略記)と現在『質・量ともに最も充実した全集』^⑩であるグロイター版(以下、KGW版と略記)との比較において問われざるを得ないのである。しかしながらこの問題は、けつして本稿のような一論文をもって答え得るものではなく、厳密かつ浩瀚な研究をもって初めて答え得るのである。そこで本稿では、問題を限定し『力へ

の意志』第一書「ヨーロッパのニヒリズム」所収の二三の断片と、それに対応するKGW版の断片のみを対象として、それらの異同を明らかにする。

二、『力への意志』をめぐる論争

—グロースオクターフ版とシュレヒタ版—

『力への意志』第一書所収断片の異同を調べるに先立ち、シュレヒタ版の刊行とともに生じたこの著作をめぐる論争についてふれよう。というのもこの論争は、シュレヒタ版の先の編集方針をめぐって湧き起こったものであり、その意味において論争を整理することは、シュレヒタ版の理念を継承するKGW版を扱ううえで意義をもつからである。この論争の発端となったシュレヒタの立場は、次の二点に要約される。第一に、『力への意志』をニーチェ自身の著作とせず、そこに含まれている断片を草稿に忠実な年代順配列にしようとした点、また第二に、ニーチェの思想発展の第二期(『人間的な、あまりに人間的』から『悦ばしき知識』まで)を、彼の本来の姿と解釈する視点である。

まずエドガー・ザーリンが、妹エリザベートによる文献偽造によって本来のニーチェ像が歪曲されたこと語り、シュレヒタの試みに賛意を示した。^⑪これに対し真向からシュレヒタを批判するのが、ルドルフ・パンヴィッツである。彼は次のように語る。①「八十年代の遺稿から」では、形のうえでこそ従来のアフォリズムがばらばらにされているが、結局すべての断片が収

録されているのであるから、不完全ながらも『力への意志』として体系的に編集されている方が都合がよい。②エリザベートによる偽造が存在するとしても、従来のニーチェ解釈に根本的な変更はない。③シュレヒタはニーチェの第一期を重視するが、晩年の著作を軽視してはニーチェの全体像を捉えられ得ない。さらにカール・レーヴィットも、シュレヒタを批判する。彼は、ボイムラーが永遠回帰を単なる宗教的概念として軽視したと同様に、シュレヒタは概念としての「力への意志」をも軽視している、こうした見解は「シュレヒタの新ニーチェ伝説」と言わざるを得ない¹³⁾、と述べている。

こうした批判に対するシュレヒタの反論は割愛せざるを得なかったが、この論争はわれわれに一つの教訓を与えるように思われる。すなわちそれは、シュレヒタが文献学的問題と思想解釈上の問題の双方において新たな見解を提示したことにより、それら二つの問題が絡み合ってしまったということである。そしてこのことは、単に「シュレヒタ論争」にのみ固有なのではない。GOA版とKGW版の異同を明らかにしようとするわれわれの試みにも、常に影のようにつきまとうのである。それゆえわれわれは、「シュレヒタ論争」の混迷を避けるべく、この試みを差しあたって文献学的問題領域に限定したいと思う。

三. 『力への意志』第一書所収断片の異同

—GOA版とKGW版の異同—

われわれは次に、『力への意志』第一書所収の断片に関し、

GOA版とKGW版ではどのような異同が見られるかを、すなわちKGW版に見られる断片が、GOA版においてどのような異同を伴っているかを明らかにする。その際、異同を調べる観点として「削除」「付加」「移動」「置換」「分割」の五点を掲げる。なお断片の「合成」は、二つの版の対応を示すことによつて明らかにする。「削除」は、KGW版に見られる言葉が、GOA版では欠けていることを示し、「付加」はその逆を示している。また「移動」は、断片内で用いられる言葉に変化はないが、二つの版で言葉の並びに変化が見られることを表わす。一方「置換」は、KGW版の断片内に見られない言葉によつて置き換えられた場合である。さらに「分割」は、KGW版では一つの断片であるにもかかわらずGOA版では複数の断片に分割されていることを示している。両版の異同をこれらの観点から調べるが、具体的な異同例についての報告は、KGW版断片9 [35]¹⁴⁾のみにとどめる。その他の断片における異同は、異同の表を提示することによって指摘する。

KGW版9 [35]は、GOA版において断片二二、十三、二二、二二に四分割される。9 [35]を訳出し、二つの版の異同及びそこに生じる問題点を明らかにする。

① ニヒリズム 正常な状態

② ニヒリズム ④ 目標が欠けている。

を欠いている。⑤ ニヒリズムは、何を意味しているのか。

⑥ 最高の諸価値が、無価値になつてしまふこと。

③ ニヒリズムは、二義的である。

④(A)精神の高揚した力としてのニヒリズム 能動的ニヒリズム

⑤ これは強さの徴候であり得る。精神の力が増大し、既成の諸目標(「確信」「信仰箇条」)が、その力に適合し得なくなる。すなわち信仰というものは、一般に生存条件の強制を、つまり生物が榮え、成長し、力を獲得する状況の權威への服従を表現している。他方、「このニヒリズムは」再び生産的に目標を、何故を、信仰を立てるには十分でない強さの徴候でもある。

このニヒリズムが相対的な力の極大に達するのは、暴力的な破壊の力として、能動的ニヒリズムとしてである。その反対は、もはや攻撃しない、疲弊したニヒリズムであろう。その最も有名な形式が、受動的ニヒリズムとしての仏教である。

⑥ ニヒリズムは、病理学的中間状態を示す(全くの無意味へと推論する法外な普遍化は、病理学的である)。たとえ生産力がまだ十分強くないとしても、またデカダンスがぐずぐずし、その救済策をまだ見出し得ないとしても、そうなのである。

⑦(B)精神の力の衰退と後退としてのニヒリズム 受動的ニヒリズム

⑧ 弱さの徴候として。精神の力が疲れ、憔悴し、既成の諸目標や諸価値が適合しなくなり、もはや信仰も見出されなくなる。諸価値と諸目標の総合(あらゆる強い文化が基

いている)が、瓦解し個々の価値が戦い合う。すなわち解体である。元氣づけ、治癒し、鎮静させ、麻痺させるすべてのものが、宗教的・道徳的・政治的・美学的といったさまざまな偽装のもとで、前景に現われ出る。

⑨ 2 こうした仮説の前提

真理は存在しないということ。事物のどんな絶対的性質も、「物自体」も存在しないということ。——これはそれ自体ニヒリズムであり、しかも最も極端なニヒリズムである。それは、事物の価値をまさしく次の点に置いている。すなわち、そうした価値に何らの実在性も対応していないし、対応してもいなかったということ、またむしろ価値定立者の側における力の徴候、つまり生の目的のための単純化にすぎないという点に。

GOA 版の断片二は、KGW 版 9 [36] の横線部②に対応している。しかし冒頭のニヒリズムの語は、傍線部③冒頭に移動し、また横線部②内の残り四文④⑤⑥の順番が、④⑤⑥⑦の順に移動している。断片十三は、横線部⑥と⑨からなり、⑥↓⑨の順に並べている。断片二は、傍線部③と④と⑦からなり、③↓④↓⑦の順に並べる。断片三は、傍線部①及び横線部⑤と⑧からなり、①↓⑤↓⑧の順に並ぶ。

GOA 版と KGW 版のこうした異同によって、以下の問題が生じる。第一に、GOA 版における四分割によって、KGW 版 9 [36] の構成が無視されてしまうということである。すなわち、ニーチェは 9 [36] において、ニヒリズムを(A)能動的ニヒリズム

ムと(B)受動的ニヒリズムとに区分し、さらにそれらの前提として最も極端なニヒリズムを考えている。ところがGOA版では、分割・移動によってこの点が考慮されていないために、最も極端なニヒリズムの位置づけが不分明になる。また、異同によって生じる第二の問題点は、分割以前の9[35]の横線部⑨冒頭にある「こうした仮説」が、「ニヒリズムが二義的であること」を指しているのにもかかわらず、GOA版断片十三では、「ニヒリズムが病理学的中間状態であること」を指す点である。さらに第三の問題点は、GOA版断片二三の冒頭の「これは」が、「正常な状態としてのニヒリズム」を指示する点である。したがって、この断片二三の文脈によれば、能動的、受動的と限定されないニヒリズム一般が、「強さの徴候」ということになる。しかし9[35]に従うならば、強さの徴候として語られているのは、能動的ニヒリズムだけなのである。たしかに、『力への意志』の編者によるKGW版9[35]のこうした誤った分割・移動が、ニーチェのニヒリズムを単に「能動的ニヒリズム」とみなす種々の解釈の一因となったことは否定し得ないであろう。本稿末尾の表はこのようにして二つの版の異同を調べた結果である。

四. むすび

異同に関する表を整理し、以下のような事実を明らかにする。GOA版『力への意志』第一書に収められている二三四の断片のうち、八八の断片が、削除・付加・移動・置換・分割のいずれかの異同を伴っている。とくに第一書の各断片を分割以前

に戻すならば、二三四の断片は一一八の断片によって構成されることになる。また、GOA版とKGW版の対応する断片間の年代的な散らばり具合を見ると、第一書二三四断片中はほぼ四割にあたる五三の断片が、「一八八七年秋」と名づけられているAbelringⅢの第九群及び第十群に属している。たしかにこのことは、第九・第十群の断片の多くが、第一書の表題である「ヨーロッパのニヒリズム」に関連し、他の断片群にはそうした例が稀有であると解するならば、何ら不自然でないかもしれない。しかし、もし第九・第十群の断片が「ヨーロッパのニヒリズム」を主題とするならば、むしろ第一書はこれらの断片群によってのみ構成されるべきであり、あえて他の断片群を用いる必要はなかった、とは言えないであろうか。第一書の四割もの断片が第九・第十群に属しているということは、この書を構成する断片が、その主題である「ヨーロッパのニヒリズム」とは異なった観点、つまり編者の恣意的な観点から取捨選択されたのではないか、という疑問を生じさせるのではなからうか。さてそれでは、これらの事実から、出発点となった問い―『力への意志』はテキストとして使用に堪え得るであろうか―に、われわれはどのような解を与え得るであろうか。ここでは、少なくとも一つ次のような見解に異議を唱え得ることを指摘する。すなわちそれは、「シュレヒタ論争」において多く説かれた論調であるが、『力への意志』に収められているアフォリズムのすべては、それぞれ一つとしては、客観的にニーチェ自身のものである。』という立場に立ち、『力への意志』の存立を

認める見解である。つまり、GOA版の『力への意志』第一書の断片は、けっして客観的にニーチェ自身のものと認めがたく、先の例に見られるようにそこには重大な意味の齟齬が生じるのである。とはいえ、われれの問いに対して結論を与えるには、第一書のみ考察では全く不十分であり、残された第二書・第三書・第四書の諸断片に関する考察をまたねばならない。

註

- 使用したテキストは、『Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari』である。引用箇所は、AbteilungとBandをそれぞれローマ数字とアラビア数字で表わし、その後にはページ数を示す。なお引用文中の傍点は、原文におけるゲシュペルトの部分を示している。
- (1) Erich Podach, *F. Nietzsches Werke des Zusammenbruchs*, Heidelberg 1961, S. 11.
 - (2) M・ハイデガーは、つづいた全集に疑問を投げかけている。Nietzsche I, Pfullingen 1961, S. 18.
 - (3) K・シムレヒタは、ニーチェは体系を持たなかった、と明白に語る。Der Fall Nietzsche, München 1959, S. 19.
 - (4) Der Wille zur Macht, kröners Taschenausgabe 78, Stuttgart 1980, S. 699.
 - (5) Werke in drei Bänden, hrsg. v. Karl Schlechta, München 1954-1956.
 - (6) Gesamtausgabe in Großformat, Leipzig 1894-1913.
 - (7) K. Schlechta, ed., Bd. III S. 1394.
 - (8) 清水本裕「ニーチェにおけるアポロ的原理とディオニュッスの美学」『詩・言語』第十二号 一九七八、四頁―五頁。
 - (9) Kritische Gesamtausgabe Werke, Berlin 1967 ff.
 - (10) 西尾幹二「ニーチェ第二部」中央公論社、一九七七年、三八七頁。
 - (11) E. Salin, „Der Fall Nietzsche“, Merkur 11, Stuttgart 1957, S. 573ff.
 - (12) R. Panwitz, „Nietzsche-Philologie“, Merkur 11, Stuttgart 1957, S. 1073ff.
 - (13) K. Löwith, „Zu Schlechtas neuer Nietzsche-Legende“, Merkur 12, Stuttgart 1958, S. 772f.
 - (14) 『力への意志』第一書の断片は、グロイター版 Abteilung Ⅵ及びⅦに属しているのであるが、多くは Abt. Ⅶに含まれている。そこで、Abt. Ⅶに属す断片につづてはローマ数字を省略して標記する。すなわち、9 [35] は「Abt. Ⅶの第九群三五番目の断片である。Abt. Ⅶに属す場合にのみ、9 [35] (Ⅶ)と標記する。」
 - (15) なお、この最も極端なニヒリズムをニヒリズムの歴史を語る5 [71]とともに考えるならば、それが人間にとって克服し得ぬ問題として理解されていることが明らかになる。
 - (16) つづいた「ニーチェのニヒリズムを単に『能動的ニヒリズム』とみなす解釈は、シュテファン・ゲオルゲを中心とするいわゆるゲオルゲ派においてとくに顕著である。」

NOI-2

(17) 二つの版の間で大文字を小文字(またはその逆)に変えること、短縮形の使用、*ism*を*isms*とすること、NBの省略は、異同としては取りあげなかった。なお紙面の都合上、異同の見られない断片は割愛した。

(18) グロイター版との対応が不明であった断片六五、及びグロイター版の二つの断片の合成であるが字句上の異同が見られない断片七五は、異同の表から除外した。

(19) 吉沢伝三郎、「ニーチェ『権力への意志』『理想』二月号一九七〇年、四二頁。なお引用中の権力の語は、力と読みかえた。こうした論調は、グロイター版刊行後も見ることが出来る。例えば、ワルター・カウフマンは『力への意志』に対応する諸断片の年代順配列を「全くまとはずれである。」と語る(*The Will to Power*, translated by Walter Kaufman, New York 1968, p. XIV.)。

(かんの・たかひこ 筑波大学大学院 哲学・思想研究科在学中)

GOA (Nr.)	KGW (Nr.)	異同				内 容 分 割
		削除	付加	移動	変換	
1 2[127]				Z.1-2		
2 9[95]	Z.1 Z.45	Z.13		Z.2-4	Z.7	Nr.2 (Z.2-4) Nr.13 (Z.25-29) Z.45-53 Nr.22 (Z.5-7 Z.31-33) Nr.23 (Z.1 Z.8-44) Nr.3 (Z.2-10) Nr.6 (Z.11-12) Nr.11 (Z.13-21) *
3 10[192]		Z.1 Z.22				Nr.4 (Z.4-19) Nr.5 (Z.21-33) Nr.55 (Z.46-211) Nr.114 (Z.35-46) vgl. Nr.4 vgl. Nr.3 Nr.8
4 5[71]	Z.1-2	Z.15				
5 5[71]	vgl. Nr.4					
6 10[192]	vgl. Nr.3					
8 7[7]	Z.1-13					

NO 2 - 2

8	7.41-50		(Z.51-62)
9	2.63-77		Nr.113
10	2.11-24		(Z.14-40)
10	9[126]	9[126]	
9	2.13-20	2.21	Nr.10
9	2.24		(Z.21-26)
11	10[92]		Nr.82
12	Nr.3		(Z.1-12)
13	9[95]		ve1.
15	9[61]		Nr.3
17	10[150]		
18	7[6]		
20	9[63]		
21	10[63]		
22	9[65]		
23	9[65]		

NO 3 - 2

23	11[123]	2.19	
24	9[123]	2.1	
25	9[107]	2.27	
26	9[107]		
27	9[44]	2.1	
28	10[42]	2.1-3	
29	24[96]		
30	11[48]		
31	25[6]		
32	6[26]		
35	9[107]		
37	9[107]		
38	17[8]		
42	14[74]		
44	17[6]		
47	14[65]		
48	14[68]		
49	15[80]		

NO 4 - 2

51	14[6]	2.1-2	2.7	2.1, 2.13
53	14[40]		2.25	2.26
54	15[13]	2.1, 2.2	2.27-28	
55	5[71]	2.25-26	2.66-71	2.9
56	11[150]	2.41-44		
57	25[9] (V)	2.51-85		
58	1[26]	ve1.		
59	21[22]	Nr.4		
60	34[43]			
62	9[130]	2.2		
65	9[131]	2.2		
66	14[208]	2.1		
69	14[226]	2.1-26	2.30	
72	15[10]	2.1-6	2.6-9	
74	9[168]	2.83-91		
75	34[16]	2.99.		
76	9[176]	2.108		

